

とっておきの新居浜検定公式テキストブック

平成29年10月29日（日）10:00～11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

全国各地で、ご当地検定がブームとなって新居浜でも、新居浜検定事業運営協議会が設置されて「新居浜検定公式テキストブック」が編集された。掲載データは、平成19年7月現在と断っている。そして毎年検定試験が実施されてきている。別子銅山に関する記述は128ページの内44ページあり、全体の34パーセントを占めている。別子銅山を読む講座として別子銅山に関して正しく理解するために別子銅山関係を中心に読んでいく。

2. 発行

平成19年10月 第1刷

平成20年 7月 第2刷 （そのまま増刷りしているよう）

3. 本の構成

新居浜のプロフィールと歴史	6ページ
新居浜の自然	6ページ
別子銅山	44ページ
多喜浜塩田	28ページ
太鼓祭り	12ページ
施設	2ページ
伝統文化	6ページ
食べ物	4ページ
経済・産業・技術	6ページ
句碑・歌碑・方言	4ページ
先人	6ページ
街歩き	4ページ

4. 新居浜検定・公式テキストブックの正誤

P8 8行 平城天皇大同4年 → 嵯峨天皇大同4年

（または、「大同4年」）

嵯峨天皇が52代天皇に即位したのが大同4年4月1日、嵯峨天

皇のイミナにふれて新居郡に改称が大同4年9月2日。

- P8 13行 種子川山および新須賀 → 種子川山、新須賀および別子山
別子山村と合併したので、現在の市域にはいる。
- P11 写真説明 多重塔 → 三重塔
- P12 1段 11行 赤石山系は、地質が複雑な地域 → 塩基性岩が分布する地質で通常
の流水がp h 7を示すところ
がp h 5を示す地域
- ※前赤石から東赤石への稜線はカンラン岩が卓越し、日本アルプスの
植物限界線超のような岩尾根の景観となっている。
- P12 1段 14行 銅山越周辺のツガザクラ → 銅山峰周辺の
- ※銅山峰の標柱が立っていて銅山峰の地名があったが、標高がわ
からないので、標高1294mとして分る銅山越えを使って別
子銅山の歴史を記述している。
- 銅山峰が尾根に当たり山頂のイメージと異なるので、表記され
なくなってきているが、ツガザクラが群生している箇所は銅山
峰である。
- 昭和30年代の広報映画では標高1324mと語られている。
- 銅山峰の表記は、P27 2段 3行にあるが、ここでは、「目出
度町から銅山越え・石ヶ山丈を経て立川中宿まで」と記述すべ
きである。

銅山峰 銅の採れる峰。元は船窪の峰と呼ばれていた。銅山越えの直ぐ南に船窪と
呼ばれる窪地があった所から命名。また西山から東山にかけては、船底のよ
うに窪んでいる吊り尾根であるところからそう呼ばれた。

峰は「うね」であり、稜線を表す。徳島県の三嶺（ミヅ）、三つのうねが並
んでいる山である。笹ヶ峰も主稜線の南に二重稜線が見られ、二つのうねで
ある。

峰は「むね」でもあり、家の棟の分水嶺の形態である。

日和佐初太郎の写真集「山・濱・島」の銅山峯の項の写真で、「銅山峯の
標柱」の写真(昭和31年)に銅山峯の表記がある。また、昭和30年代の広
報映画では標高1324mと語られている。

- P12 2段 4行 物住頭のルビ・ものずみのかしら → ものずみのあたま
- ※伊藤玉男さんが命名。頭を「あたま」と読むのは、中部山岳の
谷の先にある頂の命名の仕方である。
- P14 3段 3行 「別子ライン」という名前は、ドイツを流れるライン川の溪谷美にあ
やかかって名付けられた。
- 岐阜を流れる長良川の狭隘部をスイスを源としてドイツ、オラン

ダと流下して北海に至るライン川にあやかって「日本ライン」と命名したのを例として名づけられた。

P18 2段 1行 海拔1291mの地帯から → 海拔1324mの銅山峰から
1291mは、以前に銅山越えの標高を1291mとしたことがあった。三角測量時代の数値で、航空写真測量になって銅山越えの標高は1294mとなった。12ページの山岳地図の銅山越えの標高は1294mとなっている。

※露頭線が尾根を越えているのは、銅山越えのあたりではなく、銅山越え西のツガザクラが群生している所である。現在は西山の裾から銅山越えまでの尾根を銅山峰と呼ぶ。新居浜市街や四阪島を眺望する場所周辺である。冬季に新居浜市街から白馬の雪形を望むあたりである。

P18 2段 3・4行 鉱床は非常めずらしく、世界でも稀にみる大鉱床であった。
→ 鉱床は凸レンズ状をした含銅硫化鉄鋼のキースラーガーで、「別子鉱床」の固有名詞でもって世界で呼ばれる大鉱床であった。

P19 1段 1・2行 明治38年(1905)操業を開始した。
→ 事業を引き継いだ3代総理事鈴木馬左也によって明治38年(1905)操業を開始した。

P19 1段 14行 浸透水→湧水

※浸透水は、浸みこむ水。切羽や坑道に岩から出てくる水を説明するので、浸透では岩に入っていく水となる。

P19 2段 5行 筏津・余慶鉱床 → 筏津・積善・余慶鉱床
別子鉱床は、本山、筏津・積善・余慶の4鉱床

P19 2段 6行 72万t → 65万t
※別子銅山開坑300年を記念して刊行された「別子鉱山史」で従来の72万tから65万tに訂正された。

P19 採鉱の図中丸いシリスケ → 四角いシリスケ

P24 1段 3行 日浦は → 日浦登山口は
日浦通洞のある日浦は少し下流部の地名。日浦通洞口のあたり。

日浦 東南に山を控えて日当たりのよくない影地。三ツ森山が南南東に聳える谷間の右岸の影地である。浦通洞の入り口あたりが本来の日浦であるので、日浦登山口は、日浦から上流の左岸で日当たりが良いので「ヒナタ」と勘違いする。農家の玄関先や納屋の前の日当たりのいい小広場を「ヒノウラ」という。この「ウラ」は「ウレ」が変形して先端の意味。日の射す先端で日当たりのいい場所となる。

P24 1段 6行 225年 → 226年

※年間の計算は 「A-B+1年」 の式でおこなう。

$$1916 - 1691 + 1 = 226$$

旧別子 旧別子とは元禄4年(1691)から大正5年(1916)まで226年間別子銅山の採鉱ならびに、製錬の中心地であった所である。その間に延べ約4万人が生活した。山中には多くの遺跡が残っていて新居浜市発展の原点に位置づけられる所である。ここは住友企業の原点でもある。

日浦の登山口(880m)から銅山峰(1324m)に通じる約3.2kmの道は、元禄に開かれたところから後世には「元禄道」と称されている。明治30年代には1万人が住んでいた。明治の人口を比較すると別子山村(明治38年11,186人)、松山市(明治40年38,892)、今治町(明治34年15,798)、宇和島町(明治30年13,117)である。別子山村は、県下4番目の人口であった。

P24 写真説明 日浦入り口 → 日浦登山口

P24 3段 6・7行 これだけの轍が付くにはどれだけの荷物の往来が・・・

※岩盤の轍は、山道のカーブにつくられた掘り込みレールと専門家は見ている。なお、枕木を敷きその上にレールを載せているのは飛び出しレールと言う。

P25 足谷 悪しき谷。「悪し」に同音の「足」を当てた標記である。溪谷が急峻で人が分け入るのを拒むような悪い地形の谷。遠登志から東平に向かう谷も足谷川という。高知県内にも足谷川がある。

小足谷は、本流の足谷川に対して支流の小足谷川による。

P25 2段 4・5行 土木課と山林課の事務所を兼ねて一建設された。

→ 巨大な倉庫を建てた。明治23年(1890)5月の別子銅山開坑二百年祭には、ここを劇場として開放した。

P25 3段 8・9行 深さ約190mの所→ 予定深度270mを通り越して400mあたりまで掘ったが、鉱床を見つけられなかった。どのあたりから水が湧き出しているかは不明。

金鍋鉱床の傾斜は45度と考え45度の角度でボーリングしたから垂直では約283m下までボーリングした。

$$\text{※垂直下 } 400\text{m} \div 1.414 = 282.88\text{m}$$

$$\rightarrow \text{約}283\text{m}$$

※別子山村史・合田正良

地下600mから

山村文化・伊藤玉男

80m掘り下げたところ

南高等学校ユネスコ部

深さ80mの所

新居浜観光協会HP 深さ約190mのところ

住友金属鉱山(株)旧別子銅山案内 地下400mから吹上げ

- P26 1段 12・13行 第一通洞は、別子銅山で初めてできた通洞である。
→ 第一通洞は、江戸時代の排水坑道の代々坑に繋いでできた別子銅山で初めてできた通洞である。

**通洞 通洞は片穴
隧道は両穴 トンネルにあたる。**

- P27 2段 4行 立川中宿まで約10km→ 約20km
※重任局から口屋までが28km、立川中宿から口屋までが8km。

- P27 2段 9行 鉱石の運搬は→ 粗銅の運搬は

- P27 3段 1・3行 蘭塔場は元禄7年(1694)の別子大火災で亡くなった132名の霊を弔うための墓所である。

→現在、蘭塔場と呼ばれている小山には、は元禄7年(1694)の別子大火災で亡くなった132名の霊を弔うために観音堂が設けられた。杉本七助ほか3人の手代は歓喜坑から10m くらい下に葬られ、ここを蘭塔場と呼んだ。明治11年に広瀬幸平は、蘭塔場と呼ばれている小山に手代4人の碑石を上げた。そして、旧別子撤退で瑞応寺の墓地に降ろした。

墓標設置が始まるのは天明・寛政のころからである。本格設置は文化・文政の頃である。元禄には墓は稀な頃で、杉本七助らのものは碑石で、扁平な石板、石塔である。

- P27 観光坑道内の中持像の写真が掲載されているが、左の米俵を運び上げている人は女性であるが、仲持の図では男性である。

- P28 1段 6行 りょうなん れいみなみ
嶺南→嶺南

- P28 3段 5・6行 9月22日に採鉱を開始した。
→ 8月に山に入って――閏8月1日から採鉱を開始した。10月12日から焼吹に着手し12月晦日に及んだ。

間歩と間符 間歩は、狭義では「山師が請け負った鉱区」、だが広義では「坑道」をいう。一般に坑道のことを石見銀山や佐渡金銀山のように「間歩」と書いていたが、別子銅山の坑道は入口に護符を貼っているので「間符」と書く。

入口から右手 1 天照皇大神 2 八幡大菩薩 3 不動明王
入口から左手 1 春日大明神 2 山神宮大山積大明神 3 薬師如来

石見銀山の守護神はタタラ系の金山毘売^{かなやまひめのかみ}神。別子銅山では大山積の神。

- P28 3段 18行 開坑当時に近い姿に復元→開坑当時の四ツ留の姿に復元
P29 1段 5行 ここは古くから「船窪」と呼ばれている。その由来は、嶺北から稜線を見ると船底に見えるからである。

※船の底に見える吊り尾根地形から、または、船窪という窪地があったので「船窪の峰」と呼ばれていた。後に銅が採れるので銅山峰となった。足谷川をつめた頂なので足谷山と呼ばれたこともあるが、足谷山の呼称は山域名でもある。

- P29 峰地蔵 銅山越え(1294m)は嶺南と嶺北を結ぶ峠地形。コ型の石積みの中には無縁仏を供養するために延享元年(1744)と大正5年(1916)に造られた石仏が安置されている。もう一体の石仏の年代は不明である。

なぜ峠に無縁仏供養の石仏が安置されたのであろうか。古代の人々は峠を越える時には必ず前途の無事を祈って「たむけの歌」を唱えた。くに違いの神に手向ける鎮魂の歌であった。峠の語源の「手向」は「手向け歌」からの由来である。峠は鎮魂歌を唄うところなので、遊離魂を鎮めるところと考え供養の石仏の設置となったと考えられる。

変死者はその凶霊が人々に崇るので道の辻に埋めた。また境界となる橋の下に埋めた。そうすると、往来の人々がその上を踏み固めるので、悪霊の発散を阻止鎮圧できたと考えられた。それが道祖神の信仰となる。

銅山越えは西赤石山と西山・笹ヶ峰を結ぶ稜線の山道が交差したチマタでもあり、よそものが往来する四辻であるので、もろもろの精霊が集い潜む場所とも信じられていた。邪神の侵入を阻止する境界の守護神が後には旅の安全の神となる。手向けの地として石仏に安全を祈るようになる。

【参考文献】豊田国夫「日本人の言霊思想」(講談社術文庫)

- P29 3段 1・2行 大和間符は、銅山越から嶺南側へ少しおりたところにある。
→ 大和間符は、銅山峰から嶺南側に少し下りたところにある。
銅山越からだと歓喜坑・歓東坑に当たる。

二三の金切 大和間符は横2尺(約60cm)、縦3尺(約90cm)の江戸時代の標準的な坑口。縦に3区画、横に6区画に区分して中心区画を掘り、続いて周りを掘る。

四角に掘る練習跡は、縁起の端から歓喜坑へのプロモナード道に2ヶ所、歓喜坑の上手に1ヶ所見つかっている。

- P31 2段 6行 鋤夫→ 坑夫
P35 2段 9行 平成17年9月→ 平成17年12月

登録になったのは12月26日

東平 東平は標高750メートルの山中に位置し、唐谷、柳谷、一本松、第三、喜三谷、東平、辻坂、呉木、尾端からなる。東平の全盛期は、採鉱本部が東延から移された大正5年(1916)から端出場へと移転される昭和5年(1930)までで、昭和元年(1926)には5,000人余りが住み、山の町として賑わった。昭和13年(1938)から一般供用した東平～日浦の籠電車は、朝、昼、夕に3往復した。全長4,582mを約30分で走った。

東平坑の終坑は昭和43年(1968)。

東洋のマチュピチュと称されて観光地として有名になった。旧別子の蘭塔場をインカの遺跡と見立てて「住友のインカ」と称したところから、東平の貯鉱庫をマチュピチュのピラミッドに見立ててインカにまつわるネーミングがなされた。一の森がマイナピチュア、二の森がマチュピチュ、学校跡が神殿跡、社宅のテラスが段々畑に相對し、小女郎川・足谷川のV字谷もウルバンド川のV字谷に相對し、霧に浮かぶ様子が似ている点は語られていない。

峠は地表がタワムところから名づけられた所である。峠の古語が「田尾越え」「田和越え」で「越え」が欠落した「田尾」「田和」から新地名である「峠」への移行期の名称として「トウ」がある。「東平」の「トウナル」のトウの部分にそれにあたる。大永山の「土ヶ峠」と書いて「ツチガートウ」と発音する。松山市桑原に「淡路が峠」と記載して「アワジガートウ」と発音する。

「たわ」から「とう」への音便変化

TAWA

TOWA 前のAがOに変わる

TOA Wが落ちる

TOU AがUに変わる

- P36 写真説明の――事故に備えて入り口が横に彫られているのが特徴
→事故に備えて入り口の前に土手を築いているのが特徴
- P37 2段 2-6行 索道は、東平から新居浜側の黒石へのルート――であった。
→索道は、東平から新居浜側の黒石へのルート――であった。太平から東平へのルートも明治38年にできた。
- ※東端索道 2717m
東黒索道 3575m
太東索道 1312m

太東索道 当初の索道はプール山までであった。プール山から貯鉱庫へは「ズラシ」で下していた。その後、下の貯鉱庫の上まで索道を延長した。

- P38 1段 11行 内部は坑道を思わせるようにイメージして設計されている

→ 入り口は坑道をイメージし、内部の仕切り壁は走行に合わせて設計されている。

P 38 写真説明の往時のトンネル→小マンブ

P 39 2段 7行 60年間→ 61年間

$$1968 - 1908 + 1 = 61$$

P 39 2段 10行 土井晩翠のルビ・どいばんすい→ つちいばんすい

※「つちい」を「どい」と間違われるので晩年は「どい」でも構わないとした。

P 39 写真説明シャクナゲ→西洋シャクナゲ

※ シャクナゲの写真は西洋シャクナゲの写真である。西洋シャクナゲは日本シャクナゲよりも花も葉も大きい。花の色も濃い。

P 43 2段 鉦夫→坑夫

P 44 3段 13行 スチール・コンベアー → スチールベルト・コンベアー

P 45 2段 1行 打除鉄橋・中尾トンネル→端出場鉄橋・端出場隧道

2・3段 11行 1行 ピントラス橋→ボーストリング・ワーレントラス構造橋

ピンやボルト接合 母国で整えた製品の部材を低開発国の現地で接合するのは、リベット打ちだと火を使わなくてはならず、短期間に組み立てられるので、ピンやボルトが用いられた。しかし、ピンの摩耗やピン孔の拡大などの問題が出始めて、大正期になるとリベット接合に移行していった。ピンやボルト接合が愛用されたのは明治年間だけだった。

端出場鉄橋・端出場隧道 登録有形文化財に登録申請時に、別子鉱業所内では、端出場鉄橋・端出場隧道と命名していたので最初の名称を登録文化財名にしてもらうように依頼した。現在、「打除」と呼んでいる所が「端出場」だったが、端出場隧道の北側の向平が「端出場」となった。

P 45 2段 9行 ドイツから輸入 → ドイツのジューズブルクにあるハーコート社から輸入

※明治23年架橋の足尾銅山の古河橋と姉妹橋にあたる。

P 45 写真説明の内除鉄橋→端出場鉄橋

写真説明の中尾トンネル→端出場隧道

P 46 2段 4行 → その後、中七番ダムの堤防を嵩上げし4800kwに増強した。

P 46 3段 3行 創業開始→操業開始

- P 47 1 段 5・6・7 行 元禄 15 年(1702)に立川経由で新居浜浦へ至る輸送路が開設され、同年 8 月に立川渡瀬に立川中宿が設けられた。
→ 元禄 16 年(1703)に立川経由で新居浜浦へ至る輸送路が開設され、それに伴い立川渡瀬に立川中宿が設けられた。
- P 47 写真説明の明治 10 年代の眼鏡橋→眼鏡橋(別子銅山記念館蔵明治 14 年)
- P 48 2 段 13 行 大山積神社は、元禄 4 年(1691)の別子銅山開坑直後――勸請した。
→ 元禄 7 年(1694)の別子大火災の後に勸請した。
- P 49 2 段 3 行 レンガ造りの煙突(約 1.8 m)→レンガ造りの煙突(20.145 m)
※煙突山の旧山根精錬所煙突の高さは 20.145 m。以前は約 1.8 m と言われていたが、煙突の補強工事をする時に計測すると煙突は岩盤の上に載っているだけであった。そして地表が若干傾斜していたので煙突の北面と南面では高さが違っていた。北面と南面の平均値として 20.145 m とした。
- P 49 2 段 18 行 収容人員は約 6 万人
→ 山根グラウンドの完成時の収容人員は約 3 万人。その後増築されて 6 万人になった。
- P 49 2 段 19 行 住友各企業合同の運動会→親友会陸上競技大会
- P 49 写真説明の往年の山根グラウンド(別子銅山記念館蔵 撮影年代不詳)
→山根グラウンドの親友会陸上競技大会(別子銅山記念館蔵 昭和 5 年)
- P 51 2 段 16 行 南北に赤石連峰と→南北に南の山と
現代の望煙楼からは赤石連峰は見えない。
- P 53 2 段 5 行 住友鉱山鉄道→ 別子鉱山鉄道
- P 55 2 段 2 行 自彊舎は、明治 45 年(1912)――始まり→ 大正元年(1912)
※大正元年は明治 45 年 7 月 30 日から始まる。自彊舎の開設は 8 月 1 日からである。

自彊 易経の乾卦「天行健 君子以自彊不息」(天行健なり、君子を以て自ずから彊めて息まず)から。自分からすすんでつとめて励み怠らないこと。

- P 56 2 段 10 行 昭和通りは、昭和 6 年 7 月に完成。
→ 昭和 6 年 6 月に完成し、7 月に開通式が行われた。
※完成は 6 月 10 日
開通式は 7 月 5 日
- P 56 2 段 17 行 昭和通りに架かるのが共存橋と共栄橋である。
→昭和橋と共存橋と共栄橋と申孝橋の 4 橋である。
※昭和通りは、昭和橋から新居高橋の西詰までなので橋は 4 つ。鷲尾影時

の考え方として、会社と地域、資本と労働者は共存共栄することを基本理念とし根その考え方に嘘偽りがないとして3橋の命名となる。昭和橋から旧大丸前交差点までは昭和通り商店街であった。

鷺尾勘解治が考えたこと

01. 中央公園を一宮神社と宗像神社を中心に相当大きなものをつくる。
02. 町の所々に公園をつくる。
03. 複合的な市民会館とか市民センターも必要である。
04. 星越山の山頂に接待館を建設する。
05. 教育は施設としての学校のほかに道場のようなものを建設する。
06. 下水道、し尿処理場の建設が必要である。昭和通りにも下水道を考えた。
07. 物価高対策として、民需品の生産をする。
08. 低地の金子新田地区を移転する。
09. 東新地帯の各町村が合併して大新居浜市を建設する。
10. 町の美観として中央交差点、星越山に尖塔を建てる。
11. 磯浦から星越山まで運河を掘る。
12. 星越山山麓に電子工作工場を建設する。

P57 1段 2行 粗銅(含銅量約80%)→粗銅(含銅量約90%)

P57 2段 7-12行 新居浜に口屋が開設されるまでは、別子山中から土居の天満浦まで35kmの区間を運搬していた。それが、銅山越えから立川中宿を経由する道のりとなり――。

→ 新居浜口屋が開設した翌年の元禄16年(1703)10月に、銅山越えから立川中宿を経由する道のり約16kmの新居浜道が開通して新居浜浦が外港となった。新居浜口屋の開設時は道のり約35kmの天満道と併用していたと考えられる。

口屋跡由来記

口屋の由来は、元禄4年(1690)住友家が別子銅山を開坑し、当初粗銅を土居町天満から大阪へ運んでいたが、元禄15年(1702)銅山越を経て、立川路を新設し、新居浜浦に口屋を設けたことに始まる。

口屋は、別子銅山から運んで来た粗銅を、船で大阪へ運んだり、銅山で働く人やその家族の食糧や日用品その他の資材の搬入、往復する船や仲持、牛馬の発着事務を扱い、明治22年(1889)惣開に分店が移転するまでの188年間、別子銅山の重要な拠点として、大きな役割を果たしてきた。

その後、口屋跡は、小学校、町役場、市役所、図書館、公民館へと移り今日に至る。昭

和24年(1949) に史跡として、愛媛県の指定を受け、往時の新居浜の産業、経済、政治、文化を知る老松が静かに生きつづけている。

新居浜市教育委員会

※新居浜道開設は元禄16年(1703)10月

惣開への分店移転は明治23年(1890)

P57 写真説明の新居浜口屋(別子銅山記念館蔵 明治10年代)

→新居浜口屋(別子銅山記念館蔵 明治14年)

P61 2段 16行 今後20年ばかりで掘り尽くす→ 17年

P61 3段 16行 101歳→ 満99歳

鷺尾勘解治は、明治14年(1881)5月10日生まれ

昭和56年(1981)4月13日死亡

99歳11月4日

5. おわりに

かつて別子銅山史の留意点をまとめた。そして、この4月には改訂版を出して解説したところであるが、まさに留意点のオンパレードである。参考文献の切り貼りで文章を綴ったので、例えば、銅山越えの標高が1291mと1294mが混在している。初心者にわかりやすいテキストを作成するには幼拙ではいけない。熟考に熟考を重ね、推敲に推敲を重ねなければならない。別子銅山の参考文献が7冊では心もとない。私の手元の100分に1にしか過ぎない。別子銅山学習の参考図書をあえて挙げるとすれば72冊があげられるが、最低でも必読図書23冊は読まなければならない。別子銅山について多くの本が書かれているので間違いの再生産が多々ある。参考文献の内容を精査し全体像を把握し、最新の情報でまとめていかなければならない。そこが編集の難しさである。

銅山峰・銅山越え

旧別子山村と旧新居浜市を分けるところに銅山峰があります。昔は船の底の様に見えるところから船窪の峰と呼ばれていました。山の上に船窪と呼ばれる凹地があるところからの説もあります。この山から銅が採れるようになって銅の取れる峰から銅山峰と変わりました。峰は屋根の「棟」や畑の「畝」と同じ言葉です。高くなって連なっている地形を表します。今の「尾根」に当たります。ここからは瀬戸内海が見えます。また、ツガザクラが群生しています。

銅山峰の一番低いところが銅山越えと呼ばれる峠です。険しい山道で命を落とす人があったのでお地藏さんが建てられ「峰地藏」と呼ばれています。

日和佐初太郎の写真集「別子あのあるころ 山・浜・島」に、銅山峰の標柱が写っている写真があります。しかし、標柱が朽ちてなく無くなったので銅山峰が意識から消えて行っています。昭和30年代の新居浜市の広報映画の音声に「標高1324mの銅山峰」とあります。銅山越えの標高は、かつて1291mの標記がありましたが、現在は1294mです。三角測量から航空写真測量に変わって精度が上がった結果によります。精度がよくなり、北アルプスの剣岳も3003mから2999mになりました。各地で山頂の高さが変わりました。

峰がピークでないのと標柱が無くなって、別子銅山の位置の説明が銅山越えの標高から始まっていますが、途中から銅山峰が出てきて困惑に陥っています。別子銅山の物語には、銅山峰をはじめとして、四阪島、端出場、東平、石ケ山丈などの難解な地名が出てきます。

とっておきの新居浜検定公式テキストブックー２

平成２９年１２月２１日（木）

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

１．はじめに

別子銅山を読む講座Ⅶ－４で解説した後に、第４刷本を出すので間違い箇所を教えてくださいとの依頼があった。講座では出回っている初版本を解説した。第２刷も初版の増刷なので内容は同じである。第３刷で見直したと聞いているが、開けてみると基本的には改訂されていない。改めて参考資料として第３刷本の正誤表を作る。

２．発行

平成１９年１０月	第１刷	
平成２０年 ７月	第２刷	一部改訂
平成２２年 ８月	第３刷	かなり改訂したと聞く

３．本の構成（初版から変更なし）

新居浜のプロフィールと歴史	６ページ
新居浜の自然	６ページ
別子銅山	４４ページ
多喜浜塩田	２８ページ
太鼓祭り	１２ページ
施設	２ページ
伝統文化	６ページ
食べ物	４ページ
経済・産業・技術	６ページ
句碑・歌碑・方言	４ページ
先人	６ページ
街歩き	４ページ

４．新居浜検定・公式テキストブックの正誤

P 2		人口は平成１９年７月	→ ※最新のデータを使う
		気候は平成１７年	→ ※最新のデータを使う
P 5	１段 ６行	打除鉄橋・中尾トンネル	→ 端出場鉄橋・端出場隧道
	２段 ３行	新居浜選鉱場	→ 新居浜選鉱場跡

- 2段 8行 自彊舎 → 自彊舎跡
- 2段 9行 昭和通り(共存・共栄橋) → 昭和通り(共存・共栄・申孝・昭和橋)
- P8 8行 平城天皇大同4年 → 嵯峨天皇大同4年
(または、「大同4年」)
嵯峨天皇が52代天皇に即位したのが大同4年4月1日、嵯峨天皇のイミナにふれて新居郡に改称が大同4年9月2日。
- P9 4行 現在の人口―― (平成19年――) →
※最新のデータを使う。
- P12 1段 3行 南は東赤石山を主峰として、1,300mから1,700m級の連峰を有する赤石山系と別子銅山開坑の地である別子山地域、四国の尾根・四国山地を境にして高知県と接している。北は、
→ 南は四国の屋根・四国山地を境にして高知県と接している。
市域の南部は、日本二百名山に数えられる東赤石山を主峰として、標高1,300mから1,700m級の連峰の赤石山系があり、その中に別子銅山の大鉱床が胚胎していた。北は、
- P12 1段 11行 赤石山系は、地質が複雑な地域
→ 塩基性岩が分布する地質で通常の流水がp h 7を示すところがp h 5を示す地域
※前赤石から東赤石への稜線はカンラン岩が卓越し、日本アルプスの植物限界線超のような岩尾根の景観となっている。
- P12 2段 13行 西に続く石鎚連峰へと繋がっている。
→ 西側の石鎚連峰へと繋がっている。
- P14 3段 3行 「別子ライン」という名前は、ドイツを流れるライン川の溪谷美にあやかって名付けられた。
→ 岐阜を流れる長良川の狭隘部をスイスを源としてリヒテンシュタイン、ドイツ、フランス、オランダと流下して北海に至るライン川にあやかって「日本ライン」と命名したのを例として名づけられた。
- P16 1段 5行 銅山峰周辺では → 銅山峰を中心として角石原や旧別子の広範囲で
※アカモノはツガザクラより広範囲に棲息している。
- P18 2段 3・4行 鉱床は非常めずらしく、世界でも稀にみる大鉱床であった。
→ 鉱床は凸レンズ状をした含銅硫化鉄鋼のキースラーガーで、「別子鉱床」の固有名詞でもって世界で呼ばれる大鉱床であった。
- P18 3段 5行 明治38年(1905)操業を開始した。
→ 事業を引き継いだ3代総理事鈴木馬左也によって明治38年

(1905)操業を開始した。

P 19 1 段 14 行 浸透水→湧水

※浸透水は、浸みこむ水。切羽や坑道に岩から出てくる水を説明するので、浸透では岩に入っていく水となる。

P 19 2 段 6 行 その銅の含有量72万t(製造した銅は65万t)を→ 銅65万tを

※別子銅山開坑300年を記念して刊行された「別子鉱山史」で従来の72万tから65万tに訂正された。

P 19 採鉱の図中丸いシリスケ → 四角いシリスケ

P 21 ※平成17年以降の出来事を加筆する

21年(2009) 山根競技場観覧席、旧山根製錬所煙突、旧別子鉄道端出場鉄橋、旧別子鉄道端出場隧道、旧泉寿亭特別室棟が登録有形文化財になる。

23年(2011) 旧端出場水力発電所が登録有形文化財になる。

25年(2013) 旧四阪島製錬所大煙突が解体される。

27年(2015) 自彊舎跡地が小公園に整備される。

29年(2017) 旧広瀬氏庭園が国の名勝に答申される。

P 23 ※「全体図」の坑道の破線の角度はもっと下向きにする。

「川西エリア」内の自彊舎→ 自彊舎跡

※申孝橋、昭和橋を加筆する

P 24 1 段 3 行 日浦は → 日浦登山口は

※日浦通洞のある日浦は少し下流部の地名。日浦通洞口のあたり。

日浦 東南に山を控えて日当たりのよくない影地。三ツ森山が南南東に聳える谷間の右岸の影地である。浦通洞の入り口あたりが本来の日浦であるので、日浦登山口は、日浦から上流の左岸で日当たりが良いので「ヒナタ」と勘違いする。農家の玄関先や納屋の前の日当たりのいい小広場を「ヒノウラ」という。この「ウラ」は「ウレ」が変形して先端の意味。日の射す先端で日当たりのいい場所となる。

旧別子 旧別子とは元禄4年(1691)から大正5年(1916)まで226年間別子銅山の採鉱ならびに、製錬の中心地であった所である。その間に延べ約4万人が生活した。山中には多くの遺跡が残っていて新居浜市発展の原点に位置づけられる所である。ここは住友企業の原点でもある。

日浦の登山口(880m)から銅山峰(1324m)に通じる約3.2kmの道は、元禄に開かれたところから後世には「元禄道」と称されている。明治30年代には1万人が住んでいた。明治の人口を比較すると別子山村(明治38年11,186人)、松山市(明治40年38,892)、今治町(明治34年15,798)、宇和島町(明治30年13,117)である。別子山村は、県下4番目の人口であった。

P25 3段 5行 同年6年(1873) → 同年8年(1895)

P25 足谷 悪しき谷。「悪し」に同音の「足」を当てた標記である。溪谷が急峻で人が分け入るのを拒むような悪い地形の谷。遠登志から東平に向かう谷も足谷川という。高知県内にも足谷川がある。

小足谷は、本流の足谷川に対して支流の小足谷川による。

P25 2段 4・5行 土木課と山林課の事務所を兼ねて一建設された。

→ 巨大な倉庫を建てた。明治23年(1890)5月の別子銅山開坑二百年祭には、ここを劇場として開放した。

P25 2段 6行 2,000人を超える → 1,000人を超える

P25 3段 8・9行 深さ約190mの所 → 予定深度270mを通り越して400mあたりまで掘ったが、鉱床を見つけられなかった。どのあたりから水が湧き出しているかは不明。

金鍋鉱床の傾斜は45度と考え45度の角度でボーリングしたから垂直では約283m下までボーリングした。

※垂直下 $400\text{m} \div 1.414 = 282.88\text{m}$

→約283m

※別子山村史・合田正良 地下600mから
山村文化・伊藤玉男 80m掘り下げたところ
南高等学校ユネスコ部 深さ80mの所
新居浜観光協会HP 深さ約190mのところ
住友金属鉱山(株)旧別子銅山案内 地下400mから吹上げ

P26 1段 12・13行 第一通洞は、別子銅山で初めてできた通洞である。

→ 第一通洞は、江戸時代の排水坑道の代々坑に繋いでできた別子銅山で初めてできた通洞である。

通洞 通洞は片穴
隧道は両穴 トンネルにあたる。

P27 2段 3行 銅山峰から石ヶ山丈を経て立川中宿まで約10km

→目出度町から銅山越え・石ヶ山丈を経て立川中宿まで約20km

※重任局から口屋までが28km、立川中宿から口屋までが8km。

銅山峰 銅の採れる峰。元は船窪の峰と呼ばれていた。銅山越えの直ぐ南に船窪と呼ばれる窪地があった所から命名。また西山から東山にかけては、船底のように窪んでいる吊り尾根であるところからそう呼ばれた。

峰は「うね」であり、稜線を表す。徳島県の三嶺（ミヅ）、三つのうねが並んでいる山である。笹ヶ峰も主稜線の南に二重稜線が見られ、二つのうねである。

峰は「むね」でもあり、家の棟の分水嶺の形態である。

日和佐初太郎の写真集「山・濱・島」の銅山峯の項の写真で、「銅山峯の標柱」の写真(昭和31年)に銅山峯の表記がある。また、昭和30年代の広報映画では標高1324mと語られている。

P27 2段 9行 粗銅(含銅量80～90%)→ 粗銅(含銅量90%)

P27 3段 1・3行 蘭塔場は元禄7年(1694)の別子大火災で亡くなった132名の霊を弔うための墓所である。

→現在、蘭塔場と呼ばれている小山には、は元禄7年(1694)の別子大火災で亡くなった132名の霊を弔うために観音堂が設けられた。杉本七助ほか3人の手代は歓喜坑から10m くらい下に葬られ、ここを蘭塔場と呼んだ。明治11年に広瀬幸平は、蘭塔場と呼ばれている小山に手代4人の碑石を上げた。そして、旧別子撤退で瑞応寺の墓地に降ろした。

墓標設置が始まるのは天明・寛政のころからである。本格設置は文化・文政の頃である。元禄には墓は稀な頃で、杉本七助らのものは碑石で、扁平な石板、石塔である。

P27 観光坑道内の中持像の写真が掲載されているが、左の米俵を運び上げている人は女性であるが、仲持の図では男性である。

P28 3段 5・6行 9月22日に採鉱を開始した。

→ 8月に山に入って――閏8月1日から採鉱を開始した。10月12日から焼吹に着手し12月晦日に及んだ。

間歩と間符 間歩は、狭義では「山師が請け負った鉱区」、だが広義では「坑道」をいう。一般に坑道のことを石見銀山や佐渡金銀山のように「間歩」と書いていたが、別子銅山の坑道は入口に護符を貼っているので「間符」と書く。

入口から右手 1天照皇大神 2八幡大菩薩 3不動明王

入口から左手 1春日大明神 2山神宮大山積大明神 3薬師如来

石見銀山の守護神はタタラ系の金山毘売神^{かなやまひめのかみ}。別子銅山では大山積の神。

P28 3段 17行 平成13年(2001)に、開坑当時に近い姿に復元

→ 平成29年(2017)に修理して、再度、開坑当時の四ツ留の姿に復元

P29 1段 5行 ここは、船底に見えるから

→ ここは、嶺北から見ると船底に見えるから

※船の底に見える吊り尾根地形から、または、船窪という窪地があったので「船窪の峰」と呼ばれていた。後に銅が採れるので銅山峰となった。足谷川をつめた頂なので足谷山と呼ばれたこともあるが、足谷山の呼称は山域名でもある。

P29 **峰地藏 銅山越え(1294m)**は嶺南と嶺北を結ぶ峠地形。コ型の石積みの中には無縁仏を供養するために延享元年(1744)と大正5年(1916)に造られた石仏が安置されている。もう一体の石仏の年代は不明である。

なぜ峠に無縁仏供養の石仏が安置されたのであろうか。古代の人々は峠を越える時には必ず前途の無事を祈って「たむけの歌」を唱えた。くに違いの神に手向ける鎮魂の歌であった。峠の語源の「手向」は「手向け歌」からの由来である。峠は鎮魂歌を唄うところなので、遊離魂を鎮めるところと考え供養の石仏の設置となったと考えられる。

変死者はその凶霊が人々に崇るので道の辻に埋めた。また境界となる橋の下に埋めた。そうすると、往来の人々がその上を踏み固めるので、悪霊の発散を阻止鎮圧できたと考えられた。それが道祖神の信仰となる。

銅山越えは西赤石山と西山・笹ヶ峰を結ぶ稜線の山道が交差したチマタでもあり、よそものが往来する四辻であるので、もろもろの精霊が集い潜む場所とも信じられていた。邪神の侵入を阻止する境界の守護神が後には旅の安全の神となる。手向けの地として石仏に安全を祈るようになる。

【参考文献】豊田国夫「日本人の言霊思想」(講談社術文庫)

P29 3段 1・2行 大和間符は、銅山越から嶺南側へ少しおりたところにある。

→ 大和間符は、銅山峰から嶺南側に少し下りたところにある。銅山越からだと歓喜坑・歓東坑に当たる。

二三の金切 大和間符は横2尺(約60cm)、縦3尺(約90cm)の江戸時代の標準的な坑口。縦に3区画、横に6区画に区分して中心区画を掘り、続いて周りを掘る。

四角に掘る練習跡は、縁起の端から歓喜坑へのプロモナード道に2ヶ所、歓喜坑の上手に1ヶ所見つかっている。

P31 2段 6行 鋤夫→ 坑夫

P33 1段 17~19行 当時使用されていた坑口としては唯一、坑道内を40m余り見学することができる。

→ 坑道内を40m余り見学することができていたが、現在は閉鎖されている。

P33 ちょっと寄り道 8行

筏津山荘そばに移植し → 旧筏津山荘そばとダイヤモンド水の所に移植し

P35 東平

東平は標高750メートルの山中に位置し、唐谷、柳谷、一本松、第三、喜三谷、東平、辻坂、呉木、尾端からなる。東平の全盛期は、採鉱本部が東延から移された大正5年(1916)から端出場へと移転される昭和5年(1930)までで、昭和元年(1926)には5,000人余りが住み、山の町として賑わった。昭和13年(1938)から一般供用した東平～日浦の籠電車は、朝、昼、夕に3往復した。全長4,582mを約30分で走った。

東平坑の終坑は昭和43年(1968)。

東洋のマチュピチュと称されて観光地として有名になった。旧別子の蘭塔場をインカの遺跡と見立てて「住友のインカ」と称したところから、東平の貯鉱庫をマチュピチュのピラミッドに見立ててインカにまつわるネーミングがなされた。一の森がマイナピチュア、二の森がマチュピチュ、学校跡が神殿跡、社宅のテラスが段々畑に相對し、小女郎川・足谷川のV字谷もウルバンド川のV字谷に相對し、霧に浮かぶ様子が似ている点は語られていない。

峠は地表がタワムところから名づけられた所である。峠の古語が「田尾越え」「田和越え」で「越え」が欠落した「田尾」「田和」から新地名である「峠」への移行期の名称として「トウ」がある。「東平」の「トウナル」のトウの部分にそれにあたる。大永山の「土ヶ峠」と書いて「ツチガートウ」と発音する。松山市桑原に「淡路が峠」と記載して「アワジガートウ」と発音する。

「たわ」から「とう」への音便変化

TAWA

TOWA 前のAがOに変わる

TOA Wが落ちる

TOU AがUに変わる

P36

写真説明の――事故に備えて入り口が横に彫られているのが特徴

→事故に備えて入り口の前に土手を築いているのが特徴

P37 2段

2-6行 索道は、東平から新居浜側の黒石へのルート――であった。

→索道は、東平から新居浜側の黒石へのルート――であった。太平から東平へのルートも明治38年にできた。

※東端索道 2717m

東黒索道 3575m

太東索道 1312m

太東索道 当初の索道はプール山までであった。プール山から貯鉱庫へは「ズラシ」で下していた。その後、下の貯鉱庫の上まで索道を延長した。

- P 38 1 段 11 行 内部は坑道を思わせるようにイメージして設計されている
→ 入り口は坑道をイメージし、内部の仕切り壁は走行に合わせて設計されている。
- P 38 3 段 3 行 13 年間 → 14 年間
P 38 写真説明の往時のトンネル→小マンブ
- P 39 2 段 7 行 60 年間→ 61 年間
 $1968 - 1908 + 1 = 61$
- P 39 2 段 10 行 土井晩翠のルビ・どいばんすい→ つちいばんすい
※「つちい」を「どい」と間違われるので晩年は「どい」でも構わないとした。
- P 39 写真説明シャクナゲ→西洋シャクナゲ

※ シャクナゲの写真は西洋シャクナゲの写真である。西洋シャクナゲは日本シャクナゲよりも花も葉も大きい。花の色も濃い。

- P 40 1 段 12 行 62 年間 → 63 年間
P 40 2 段 10 行 22 年間 → 23 年間
P 43 2 段 10 行 鉱夫→坑夫
P 44 3 段 13 行 スチール・コンベアー → スチールベルト・コンベアー
P 45 2 段 1 行 打除鉄橋・中尾トンネル→端出場鉄橋・端出場隧道
2・3 段 11 行 1 行 ピントラス橋→ボーストリング・ワーレントラス構造橋

ピンやボルト接合 母国で整えた製品の部材を低開発国の現地で接合するのは、リベット打ちだと火を使わなくてはならず、短期間に組み立てられるので、ピンやボルトが用いられた。しかし、ピンの摩耗やピン孔の拡大などの問題が出始めて、大正期になるとリベット接合に移行していった。ピンやボルト接合が愛用されたのは明治年間だけだった。

端出場鉄橋・端出場隧道 登録有形文化財に登録申請時に、別子鉱業所内では、端出場鉄橋・端出場隧道と命名していたので最初の名称を登録文化財名にしてもらうように依頼した。現在、「打除」と呼んでいる所が「端出場」だったが、端出場隧道の北側の向平が「端出場」となった。

- P 45 2段 9行 ドイツから輸入 → ドイツのジュースブルクにあるハーコート社から輸入
 ※明治23年架橋の足尾銅山の古河橋と姉妹橋にあたる。
- P 45 写真説明の内除鉄橋→端出場鉄橋
 写真説明の中尾トンネル→端出場隧道
- P 46 1段 2行 内除鉄橋、中尾トンネル→端出場鉄橋、端出場隧道
- P 46 1段 5行の後 ※ 加筆する。
 平成21年8月、登録有形文化財になった。
- P 46 2段 4行 → その後、中七番ダムの堤防を嵩上げし4800kwに増強した。
- P 46 3段 11行の後 ※ 加筆する。
 平成23年1月、登録有形文化財になった。
- P 47 1段 5・6・7行 元禄15年(1702)に立川経由で新居浜浦へ至る輸送路が開設され、同年8月に立川渡瀬に立川中宿が設けられた。
 → 元禄16年(1703)に立川経由で新居浜浦へ至る輸送路が開設され、それに伴い立川渡瀬に立川中宿が設けられた。
- P 47 写真説明の明治10年代の眼鏡橋
 → 眼鏡橋(別子銅山記念館蔵明治14年)
- P 48 2段 1行 サツキが1万本植えられ → サツキが1万本、周辺には3000本植えられ
- P 48 2段 13行 大山積神社は、元禄4年(1691)の別子銅山開坑直後―――勸請した。
 → 元禄7年(1694)の別子大火災の後に勸請した。
- P 49 2段 3行 レンガ造りの煙突(約20m)→レンガ造りの煙突(20.145m)
 ※煙突山の旧山根精錬所煙突の高さは20.145m。以前は約18mと言われていたが、煙突の補強工事をする時に計測すると煙突は岩盤の上に載っているだけであった。そして地表が若干傾斜していたので煙突の北面と南面では高さが違っていた。北面と南面の平均値として20.145mとした。
- P 49 2段 7行の後 ※ 加筆する。
 平成21年8月、登録有形文化財になった。
- P 49 2段 18行 収容人員は約6万人
 → 山根グラウンドの完成時の収容人員は約3万人。その後増築されて6万人になった。
- P 49 2段 21行の後 ※ 加筆する。
 平成21年8月、登録有形文化財になった。
- P 49 2段 19行 住友各企業合同の運動会→親友会陸上競技大会
- P 49 写真説明の往年の山根グラウンド(別子銅山記念館蔵 撮影年代不詳)

→山根グラウンドの親友会陸上競技大会(別子銅山記念館蔵 昭和5年)

P50 2段 4行 墓石 → 碑石

P53 1段 1行の後 ※加筆を要する。

また、平成29年には庭が国の名勝に答申される。

P51 2段 16行 南北に赤石連峰と→南北に南の山と

現代の望煙楼からは赤石連峰は見えない。

P53 1段 10行の後 ※加筆を要する。

建屋は撤去されて、現在は石積が残っている。

P53 2段 5行 住友鉱山鉄道→ 別子鉱山鉄道

P53 ※山田社宅の写真は最新のものに変える。

P55 2段 2行 自彊舎は、明治45年(1912)―――始まり→ 大正元年(1912)

※大正元年は明治45年7月30日から始まる。自彊舎の開設は8月1日からである。

自彊 易経の乾卦「天行健 君子以自彊不息」(天行健なり、君子を以て自ずから彊めて息まず)から。自分からすすんでつとめて励み怠らないこと。

P56 2段 3行 現在の自彊舎は、―――いる。

→ ※リライトを要する。

菊本町の自彊舎は撤去され、跡地は平成27年に小公園として整備され、広瀬公園に移転していた共存・共栄橋の親柱も再移転して保存されている。

P56 2段 9行 昭和通り(共存・共栄橋)

→ 昭和通り(共存・共栄・申孝・昭和橋)

P56 2段 10行 昭和通りは、昭和6年7月に完成。

→ 昭和6年6月に完成し、7月に開通式が行われた。

※完成は 6月10日

開通式は7月 5日

P56 2段 17行 昭和通りに架かるのが共存橋と共栄橋である。

→昭和橋と共存橋と共栄橋と申孝橋の4橋である。

※昭和通りは、昭和橋から新居高橋の西詰までなので橋は4つ。鷲尾影時の考え方として、会社と地域、資本と労働者は共存共栄することを基本理念とし根その考え方に嘘偽りが無いとして3橋の命名となる。昭和橋から旧大丸前交差点までは昭和通り商店街であった。

P56 3段6・7行 ※「当時の―――保存される。」は、削除する。

鷲尾勘解治が考えたこと

13. 中央公園を一宮神社と宗像神社を中心に相当大きなものをつくる。
14. 町の所々に公園をつくる。
15. 複合的な市民会館とか市民センターも必要である。
16. 星越山の山頂に接待館を建設する。
17. 教育は施設としての学校のほかに道場のようなものを建設する。
18. 下水道、し尿処理場の建設が必要である。昭和通りにも下水道を考えた。
19. 物価高対策として、民需品の生産をする。
20. 低地の金子新田地区を移転する。
21. 東新地帯の各町村が合併して大新居浜市を建設する。
22. 町の美観として中央交差点、星越山に尖塔を建てる。
23. 磯浦から星越山まで運河を掘る。
24. 星越山山麓に電子工作工場を建設する。

P57 2段 7-12行 新居浜に口屋が開設されるまでは、別子山中から土居の天満浦まで35kmの区間を運搬していた。それが、銅山越えから立川中宿を経由する道のりとなり――。

→ 新居浜口屋が開設した翌年の元禄16年(1703)10月に、銅山越えから立川中宿を経由する道のり約16kmの新居浜道が開通して新居浜浦が外港となった。新居浜口屋の開設時は道のり約35kmの天満道と併用していたと考えられる。

口屋跡由来記

口屋の由来は、元禄4年(1690)住友家が別子銅山を開坑し、当初粗銅を土居町天満から大阪へ運んでいたが、元禄15年(1702)銅山越を経て、立川路を新設し、新居浜浦に口屋を設けたことに始まる。

口屋は、別子銅山から運んで来た粗銅を、船で大阪へ運んだり、銅山で働く人やその家族の食糧や日用品その他の資材の搬入、往復する船や仲持、牛馬の発着事務を扱い、明治22年(1889) 惣開に分店が移転するまでの188年間、別子銅山の重要な拠点として、大きな役割を果たしてきた。

その後、口屋跡は、小学校、町役場、市役所、図書館、公民館へと移り今日に至る。昭和24年(1949)に史跡として、愛媛県の指定を受け、往時の新居浜の産業、経済、政治、文化を知る老松が静かに生きつづけている。

新居浜市教育委員会

※新居浜道開設は元禄16年(1703)10月

惣開への分店移転は明治23年(1890)

P57 写真説明の新居浜口屋(別子銅山記念館蔵 明治10年代)

→新居浜口屋(別子銅山記念館蔵 明治14年)

P61 2段 16行 今後20年ばかりで掘り尽くす→ 17年

P61 **鷺尾勘解治は、明治14年(1881)5月10日生まれ**

昭和56年(1981)4月13日死亡

99歳11月4日

5. おわりに

かつて別子銅山史の留意点をまとめた。そして、この4月には改訂版を出して解説したところであるが、第3版本も留意点のオンパレードに変わりがなかった。新たに発見したのも出て来る。基本的には参考文献の切り貼りで文章を綴ったままである。初心者にわかりやすいテキストを作成するには幼拙ではいけない。熟考に熟考を重ね、推敲に推敲を重ねなければならない。別子銅山の参考文献が7冊は、私の本棚の100分に1にしか過ぎない。別子銅山学習の参考図書をあえて挙げるとすれば72冊があげられるが、最低でも必読図書23冊は読まなければならない。別子銅山について多くの本が書かれているので間違いの再生産が多々ある。参考文献の内容を精査し全体像を把握し、最新の情報でまとめていかなければならない。そこが編集の難しさであることを改めて知る。